SPECIAL INTERVIEW 来日1ヵ月前、緊急インタビュー!!

Vivian Campbell

DEF LEPPARD

「このバンドに入って23年…、その間で最もストロングだ!」

先頃、新作のリリースを突如発表したデフ・レパード。11月に控えた久々のジャパン・ツアーを前に、ヴィヴィアン・キャンベルが饒舌に語りまくる!!!

インタビュー&文●坂東健太　Kenta Bando
通訳&翻訳●中村美夏　Mika Nakamura
pix : Ross Halfin (except ※ on P.20)

『SONGS FROM THE SPARKLE LOUNGE』('08年)をリリースしてから、早7年。以前から「オリンピック的なペースでアルバムを作る」と自虐的に語っていたデフ・レパードだが、未だかつてこれほどまでにインターヴァルを空けたことはなかった。今年中に作品を発表するらしいという噂はあったが、そうこうしている内に日本公演が間近に迫っているぞ、どうしたデフ・レパード…と関係者がやきもきしていた(苦笑)矢先の9月14日、突如として新作『DEF LEPPARD』の情報が解禁。10月30日に発売されることが、遂に正式に決定した。編集部でも早速取材をオファーしたが、今回まず話を聞かせてもらいたいのは、2人のギタリストのうちやはりヴィヴィアン・キャンベルの方だ。以前から患っていた悪性リンパ腫が再発したにもかかわらず、治療しながら果敢に活動を続ける鉄人のような彼だが、実際のところ体調はどうなのか、心配しているファンは日本にも山ほどいるわけだから。断られる可能性も考えてはいたものの、意外にも素早くOKの返事が。9月某日、電話取材に応じてくれた彼の口調は、普段通りの饒舌ぶりだった。

僕の方こそ色んな人から勇気をもらっているよ

YG：お久しぶりです、調子はいかがですか？
ヴィヴィアン・キャンベル(以下VC)：ああ、元気でやっているよ。明日からまた北米ツアーが再開されるんだけど、何だか妙に盛況でね。本当に想像以上の盛り上がりなんだ。新譜の発売もまだなのにね。
YG：6月から10月初頭にかけて、スティクス、テスラと共に北米を回っているんですよね。いずれもベテランですが、長いキャリアを持つバンドが今も大会場を埋めることができるというのが凄いですよね。
VC：本当にそうだね。特に今回は1つのバンドだけのファンが来ているわけじゃなくて、誰も前座扱いしていない。テスラが始まる7時には、客席がほぼ埋まっているよ。グッズの売り上げも凄いらしい(笑)。去年、僕らはKISSと一緒に回っただろう？　あの時は賛否両論だった。両方観られてラッキーに感じた人がいる反面、チケットが高過ぎると思ったファンも多かったみたいだ。それに僕らの出番が先だったから、まだ日が落ちていない中で演奏を始めなければならず、時間の関係でどうしても演出をフルに見せられなかった…。でも今回はいい形のパッケージと言えるな。
YG：それにしても、あなたは'14年の治療中にもデフ・レパードとラスト・イン・ラインのツアーを続けていたし、とてつもない精神力ですね。同じような病気を抱えている世界中のファンから、「勇気をもらった」みたいなメッセージを受け取っているのでは？
VC：10年前なら誰とも交わらずにいたかもしれないけど、SNSの力って凄いよね。僕の方こそ色んな人から勇気をもらっているよ。もし僕が他人に勇気を与えているとしたら、それは想定外のことさ。最初に悪性リンパ腫と宣告された時、真っ先に何をやったと思う？　カツラを作った！(笑)　僕はロックンローラーだから、さすがにツアーで髪がないのはどうかと思って、かなりリアルなウィッグを作ったんだ。でもいざ装着したら居心地が悪くて、15分が限界だった。その時かな、「別に隠すことなんかない、公表しよう」って思ったのは。だから髪がないままステージに立ち、おかげで解放感に満たされた。病気になって色んなことを学んだよ。価値観についても考えさせられたし、今の僕はとてもポジティヴなんだ。とにかく一番大事なのは、仕事を続けること。それが治療にもつながる

と思うし、バンドがツアー中だと知りながら1人で家で悶々としていることほど、辛い状況はない。それにオーディエンスから受け取るポジティヴなエナジーは凄まじいんだ。

YG：それを聞いて安心しました。さて…北米ツアーのセットリストはグレイテスト・ヒッツ的な選曲だったようですが、11月の来日公演では若干変えたりしますか？

VC：アルバムからの先行シングル「Let's Go」が解禁されたから、一応リハーサルは始めているよ。すぐにセットリストに組み込むかは定かじゃないけどね。ただ日本では確実にやるだろうし、他にも新曲でできるものがあったら採用するだろう。個人的には定番以外もたまにはやりたいし、レアな曲をやるなら日本だろうね。ただリストを組むのはサヴ（リック・サヴェージ／b）だから、彼の気分次第だな。僕に任せられたら、ひと晩中ギター弾きまくりのディープなトラックばかり選んでしまうよ！（笑）

僕らのルーツや背景を網羅し投影している

YG：新作『DEF LEPPARD』の音、早速聴かせていただきましたが、素晴らしい内容の充実ぶりですね。

VC：ああ、ありがとう。僕もとてもハッピーだよ。このバンドに入って既に23年になるけど、おそらくその間で最もストロングな作品だろう。

YG：前作から7年…、デフ・レパード史上最長のインターヴァルが空いてしまいましたが、どうしてこれほど長く掛かったのでしょう？

VC：実作業は1年くらいだけど、確かに期間は長かった。理由はまず…果たして今のご時世、アルバムを作ること自体に意味があるのか、たくさん話し合ったんだ。ご存じのように、僕らはさっさと作れるバンドじゃない。とても時間が掛かる。ということは金も掛かる。メンバーの3人がアメリカ、2人がヨーロッパに住んでいるから、航空費もかさむしね。それにデフ・レパードのアルバム作りは実験的要素が濃いから、とにかくやってみて、使えるものだけを使うんだ。つまり1歩進んで2歩下がる場合も多いし、決められた道を進むわけでもない。そんなこんなで膨大な経費がかさむ中、果たして最終的に売り上げが立つのか…。だから最初は、まずはミニ・アルバム程度を作ってみるか、ってアイデアもあった。ただどういう形であれ、作るとすれば1つ決めていたのは、初期の頃のロックな要素を取り戻したかったということ。今のデフ・レパードは、厳密に言えばロック・バンドじゃない。『HIGH 'N' DRY』（'81年）の頃はAC/DC系のストレートな音楽性だったけど、『PYROMANIA』（'83年）以降はもっと分かりやすい音を追い始めた。もちろん一般的な括りはロックだけど、様々な要素が足されたことで一筋縄では行かなくなったんだ。…これはあくまでもスタジオ・アルバムの話だよ。一旦ステージに上がれば、今も昔も変わらずロックしている。だからこそ今回の作品では、そのライヴ感をそのまま捕らえたかったんだ。その方法として、まずベーシック・トラックはスタジオ・ライヴ的に録った。

YG：なるほど。

VC：今回のレコーディングは、3つの段階があったんだ。まず第1段階では、ダブリンにあるジョー（エリオット／vo）のスタジオに全員で入った。「そんなこと、どのバンドもやっているだろう？」と言われるかもしれないけど、少なくともデフ・レパードはほとんどやって来なかったよ。最後に全員で一緒にスタジオに入ったのは『SLANG』（'96年）の時で、20年近く前だ。ただ僕はディオに在籍した頃からそうやってアルバムを作って来たし、オールド・ファッションなやり方の方がしっくり来る。で、そうやってスタジオでロックな要素をキャプチャした後、数ヶ月後に第2段階へ突入した。ただ僕自身はカリフォルニアで病気の治療に専念することになり、そこは全く関わってない。

YG：それは残念でしたね…。

VC：いや、正直言うと少しホッとした（笑）。第2段階はいわゆるコンセプト構築ステージさ。ものすごく細かくて、いっぱい悩んで、たくさん話し合って…、とにかく大変なんだ。前作ではみんなで持ち寄った曲をさっさと録って組み立てたから、イージーだったと言える。でも今回はいつものデフ・レパードらしく、この第2段階がとても濃かったようだ。1曲ずつはもちろん、アルバム全体としての流れ、形、色…を探る。ハッキリ言うけど、僕はすごく苦手だ！　辛過ぎるよ。直感で曲を作ると言うよりは、一種の工作だ。「ピンク・フロイドっぽい曲を書いてみよう」「じゃあ『THE DARK SIDE OF THE MOON』（'73年）を掛けてくれ」「こんな感じか。Keyは何？」「テンポは？」「コード進行はどう？」「長さは？」…。あくまでも例に過ぎないけど、本当にこんな会話が進められて、個人的にはあまり楽しくない。23年経っても慣れないけど、それこそがデフ・レパードの伝統だし、それはそれで凄いことだ。ただ、欠席できて良かった！（笑）

YG：それはそれは（笑）。

VC：そして最後の第3段階は、磨き上げのステージ。僕はここからまた参加して曲を仕上げた。さっき「23年で一番強力なアルバム」と言ったけど、それが一番参加時間の少ない作品だっていうのは、皮肉だよね。だって、僕がいない方がいいものが作れるのか…ってどうしても思うだろう？　特にソング・ライティングの面でほとんど貢献できなかったのは残念だ。それは病気のせいでもあるけど、実は離婚した時にスタジオを手放してしまい、デモを作れなくなったのが大きい。デフ・レパードの場合、ちょっとしたギターと歌で軽く録るだけじゃ駄目なんだ。デモの段階でほぼ仕上がってないと、聴いてさえもらえない。今の僕のスタジオはiPhoneだから、全然足りないよ（笑）。ただ参加時間が少なかったおかげで、客観的に、いちファンとしてアルバムを聴くことができた。そんな僕がいい仕上がりだと言うんだから、間違いないよ！

YG：セルフ・タイトルを付ける場合、内容に絶対的な自信を持っている場合がほとんどですが、つまりデフ・レパードの場合もそういうことなんですね。

VC：そう、とても“らしい”アルバムだ。すごくデフ・レパードっぽい。と同時に、とても振り幅の広い、ヴァラエティに富んだ作品だとも思う。手の込んだポップ・チューンもあれば、アコースティックな側面もサイケデリックな一面も垣間見られる。それらはデフ・レパードにとって新境地だ。あと新境地と言えば、「We Belong」ではメンバー全員が個別に歌っている。これも初めての試みだ。僕らは壮大なヴォーカル・ハーモニーで知られているけど、個人個人がリード・ヴォーカルを執った曲は初めてだ。

YG：ギター的に最も印象的だったのは、サウンド自体の存在感の強さでした。周波数レンジが広いというか、空間を埋め尽くすほどビッグというか。

VC：ありがとう。さっきも言ったように、今回はロック・テイストを取り戻すことが目的のひとつだった。もちろんデフ・レパードのアルバムだから、いくらベーシック・トラックをライヴ録音しても、その上に乗って来るオーヴァーダブの量は半端じゃない。ファンの中にはもう一度『HIGH 'N' DRY』みたいな作品を聴きたいと思っている人も少なくないはずだけど、あれはものすごく生々しいアルバムで、今のデフ・レパードを象徴しているわけではない。あの時代だったから良かったんだ。その後バンドはより洗練された音を追求し、そんな今のデフ・レパードがロックな作品を求めるとしたら、まさに今回のアルバムのようになる。だからこそ「Man Enough」のような曲が登場する。あれは意図的にクイーンっぽさを追求した。一目瞭然、「Another One Bites The Dust」（'80年『THE GAME』収録）を聴きながら作ったようなものさ（笑）。それが目的だったんだ。僕らはレッド・ツェッペリンやAC/DCと同じくらい、クイーンやデヴィッド・ボウイに影響されているからね。そのバックグラウンドが表面化するのは、仕方ないことだ。

YG：ツェッペリンっぽいと言えば、9曲目の「Battle Of My Own」ですよね。

VC：まさに。そんな風に、僕らのルーツや背景を網羅し投影しているという意味でも、アルバムを『DEF LEPPARD』と名付けたのは適切だったと思う。これまでの僕ら、そして今の僕ら、みたいな意味合いだ。

全員が関わっている真のコラボレーションだ

YG：いくつかの曲について、具体的に聞かせてください。まず1曲目「Let's Go」ですが…。

VC：もろにデフ・レパードだよね。だってリフは「Pour Some Sugar On Me」（'87年『HYSTERIA』

NEW ALBUM　2015.10.30 release!!

『DEF LEPPARD』／DEF LEPPARD

（ワードレコーズ CD GQCS-90056／通常盤）※その他、各種限定セットあり

①Let's Go ②Dangerous ③Man Enough ④We Belong ⑤Invincible
⑥Sea Of Love ⑦Energized ⑧All Time High ⑨Battle Of My Own
⑩Broke 'N' Brokenhearted ⑪Forever Young ⑫Last Dance
⑬Wings Of An Angel ⑭Blind Faith
⑮Last Dance（demo／日本盤ボーナス・トラック）

●既にYouTubeなどで公開されている先行シングル曲①を聴けば、バンド最大のヒット作である『HYSTERIA』に通じるキャッチーさ、緻密な作り込みを如実に感じるはず。「今回のデフ・レパードはマジだ！」と思わせる強烈なオープニングだ。続く②では分厚く重ねられたギター・サウンドの力強さが印象的で、ヴィヴィアンの言うロック・テイストがよく分かる。ただその後はかなりヴァラエティに富んだ内容となっており、クイーンを思わせる③、T・レックス風の⑥、ZEPの3枚目的な⑨といった彼らのルーツを如実に示したものもかなりあって、実に楽しい作風。

「オーディエンスから受け取るポジティヴなエナジーは凄まじい！」

収録）！　敢えて目指したんだから、それでいいんだよ。あれはデフ・レパード最大のヒット曲だし、自分自身をパクっても何ら問題はない。ソロは最初がフィルで、次が僕、２人がハーモニーで絡むところもある。正直、ブライアン・メイから「ギター・リックを返せ」とクレームが来るんじゃないかと思っている（笑）。

ＹＧ：最高のオープニングですよ。

ＶＣ：ガツンと行けるから、ショウの幕開けにもいいよね。実際、新曲をやるなら１曲目がいい。観客はバンドが出て来て興奮しているから、知らない曲でもあまり関係ないし、トイレ・タイムにもならない（笑）。

ＹＧ：「We Belong」、それに11曲目「Forever Young」にも、中間にメロディアスな掛け合いが出て来ますね。単純に交互でもなく、ハーモニーでもなく、緩やかにフレーズが展開して行く…。

ＶＣ：そうだね。「We Belong」は実際にフィルと同時に弾いて録ったんだ。ギター・ソロと言うより小曲みたいだ。互いのプレイをひけらかすのではなく、曲の一部となってインタラクティヴかつメロディックに進んで行く。とても良い雰囲気だと思うな。あと、「Forever Young」ってデヴィッド・ボウイっぽい曲だよね？　あれもフィルと２人で同時に弾いていると思うけど、正直よく覚えていない…（笑）。

ＹＧ：10曲目「Broke 'N' Brokenhearted」のメロディックなソロも印象的ですが、これはヴィヴィアン？

ＶＣ：僕っぽいよね。でも実はフィル（コリン）！　さすがにこれだけ長く一緒にいると、お互いに影響し合っているみたいだ。

ＹＧ：「Battle Of My Own」は先ほど話した、ツェッペリンっぽいアコースティックの素敵な曲ですね。

ＶＣ：ああ、とても好きだ。できることならライヴでも演奏したい。セットリストに緩急を付けるという点でもいいと思うけど、どうかな？　これはジョーとサヴの曲で、僕が不在だった第２段階で作られたんだ。アコースティックを弾いているのはジョーだよ。最後のエレクトリックは僕だけどね。

ＹＧ：14曲目の「Blind Faith」。後期のザ・ビートルズを思わせるドラマティックな曲で、展開がいくつも出て来ますね。最後を飾るに相応しいと思います。

ＶＣ：嬉しいコメントだ。果たしてこれを最後にすべきか、かなり話し合ったよ。とても力強い曲だけど、14曲入りアルバムの最後まで人々は聴き続けてくれるのだろうか…という議論だ。最近では６～７曲ほどの集中力しかない人も多いからね。でも最終的には、アーティスティックな観点から最後に置くべきだろうということになった。今の時代にアルバムを買ってくれる人は、きっと通して聴いてくれるはずだという結論に至ったのさ。であれば、この曲ほどフィナーレに相応しいものはない。

ＹＧ：この手の曲は誰かが確固たるヴィジョンを持って引っ張って行かないと完成しないと思うのですが、実際はどうでした？

ＶＣ：元々はフィルのちょっとしたアイデアから始まったんだけど、第１段階で生まれた曲だから全員が関わっている。真のコラボレーションだ。最初からビートルズっぽいサイケデリックな曲が書きたかったんだ。言うなればブロック積みのようなもの。最初のブロックを置いて、そこからインスパイアされた次のブロックを作って、それらを合わせて…という風にね。そうやってセクションごとに書いたから、きっと曲がりくねって進むだろうとは思っていた。でも秩序がなくてもかまわないさ、全体像として面白ければいい。レコーディング自体も楽しかったし、僕らにとっては新境地のひとつだろうね。

ＹＧ：レコーディングで使用した機材を教えてもらえますか？

ＶＣ：相変わらずの機材ばかりだけど、今もメインは黒いギブソン・レスポール・カスタム。'78年製で…この話は憶えている人もいるかもしれないけど、『ADRENALIZE』（'92年）ツアーの時、ナッシュヴィルのリサイクル・ショップの壁に掛かっていたものなんだ。手にしたらネックの感触が良くて、400ドルで買った。でも４年後の『SLANG』ツアーの時、飛行機で移動中にボディーが真っ二つに割れてしまった。で、ヘッドとネックとフロント・ピックアップを救い出し、ボディーは新しいものに替えたんだ。僕の子供たちが面白がってステッカーを貼りまくったのも、そのまま残してある。アンプはエングルのリッチー・ブラックモア・モデルを使った。他はジム・ダンロップのワウくらい。とてもベーシックだよ。

ＹＧ：ありがとうございます。では最後に、11月の来日公演を楽しみにしている読者へメッセージを。

ＶＣ：待ち遠しいのは僕らも同じさ。最高に楽しいはずだから、絶対に観に来てほしいな。あと、ラスト・イン・ラインの方もよろしく！　アルバムはとっくにできているんだけど、デフ・レパードが忙し過ぎて、まだ発売のタイミングを見計らっているんだ。こっちもギターを弾きまくっているから、ぜひチェックしてくれ。ちなみにそのアルバムでは、『HOLY DIVER』（'83年）で使ったギターを引っぱり出して使っている。15歳の時に手に入れた初めてのレスポールさ。

TOUR INFORMATION ■ツアー初日のセットリストで来日公演を予習！

【SET LIST】2015. 4. 15
at South Okanagan Events Centre, Penticton, BC, Canada

①Rock! Rock! (Till You Drop) ②Animal ③Foolin' ④Promises
⑤Paper Sun ⑥Love Bites ⑦Armageddon It
⑧Rock On [DAVID ESSEX cover] ⑨Two Steps Behind ⑩Rocket
⑪Bringin' On The Heartbreak ⑫Switch 625 ⑬Hysteria
⑭Let's Get Rocked ⑮Pour Some Sugar On Me
[encore] ⑯Rock Of Ages ⑰Photograph

※各曲の収録アルバム
『HIGH 'N' DRY』（2nd／'81年）…⑪⑫
『PYROMANIA』（3rd／'83年）…①③⑯⑰
『HYSTERIA』（4th／'87年）…②⑥⑦⑩⑬⑮
『ADRENALIZE』（5th／'92年）…⑭
『RETRO ACTIVE』（レア・トラック集／'93年）…⑨
『EUPHORIA』（7th／'99年）…④⑤
『YEAH!』（カヴァー・アルバム／'06年）…⑧

※pic:Ash Newell

●11月のジャパン・ツアーまで、残りほぼ１ヵ月。その予習という意味も込めて、ここには今年４月から行なわれているワールド・ツアーの初日のセットリストを掲載した。インタビュー時の北米ツアーでも基本的にこの曲目から大きく変わっていないものの、もちろん来日時は新曲も混ざって来るはず。請うご期待！

11／９（月）東京・日本武道館（問）ウドー音楽事務所　☎03-3402-5999
11／10（火）大阪・オリックス劇場（問）大阪ウドー音楽事務所　☎06-6341-4506
11／12（木）愛知・ゼップ名古屋（問）CBCテレビ事業部　☎052-241-8118
11／13（金）宮城・仙台サンプラザホール（問）河北チケットセンター　☎022-211-1189
（問）TBC東北放送 事業部　☎022-227-2715（問）ニュース・プロモーション　☎022-266-7555
［ウェブサイト］（PC）http://udo.jp/　（携帯電話）http://m.udo.jp/